

研究会終了報告

以下の二つの研究会が、3月末をもって2年間の活動を終了しました。それぞれ、研究成果はアジ研研究双書として出版されます。

■「アフリカとアジアの農産物流通」研究会

この研究会は、アフリカとアジアの国々の農産物流通の実態を、政策や制度の変化に注目して明らかにしようとしたものである。事例研究の対象国は、アフリカから4カ国（ガーナ、ザンビア、エチオピア、タンザニア）とアジアから4カ国（中国、ベトナム、ミャンマー、インドネシア）の計8カ国である。これらの国々はいずれも、1980年代以降に政府介入型から自由主義型への政策転換を経験した。研究会ではこれらアフリカとアジアの国々の農産物流通部門の変遷を分析することにより、世界的な経済自由化の流れを反映した途上国の農産物流通の実態を捉え直し、今後の研究の方向性を探ることを意図した。

研究会の成果は、『アフリカとアジアの農産物流通』（アジア経済研究所研究双書）として出版した。その内容は以下のとおりである。

序章 アフリカとアジアの農産物流通 (高根務)

<第I部 政策と制度の分析>

第1章 中国における食糧流通政策の変遷と農家経営への影響 (寶剣久俊)

第2章 ザンビアにおける自由化後のトウモロコシ流通と価格 (児玉谷史朗)

第3章 ベトナムのコメ流通－流通構造から見たドイモイの再評価－ (坂田正三)

第4章 エチオピアのコーヒー流通におけるオークションの役割：政府による競争の場の提供と価格情報の伝達 (児玉由佳)

第5章 ガーナのココア流通制度の変遷（1885-2000年） (高根務)

<第II部 村落レベルの実態分析>

第6章 中部ジャワの米生産地域における流通市場と米商人：ヨグヤカルタ、セイェガン郡の事例研究 (米倉等・ジャムハリ)

第7章 ミャンマーにおける農産物流通自由化と農家経済：リョクトウ産地の事例から (岡本郁子)

第8章 タンザニア・メル山麓の半乾燥平原における

■「新アフリカ経済論」研究会

本研究会は昨年9月13、14の両日に幕張で合宿を行った。会議室のテーブルには研究会各委員の第一稿が積み上げられた。2001年の前身研究会発足から皆が暖めてきた思考の一次結晶を、オブザーバーを含め十数の頭脳を発光させる勢いで、一つ一つ時間をかけて検討した。

10月19日には最終会合を開いて、各委員の論叢が結集することになる本のイメージを固めていった。ときにメール回線が発熱するかとさえ思わせた熱いやりとりを繰り返して、11月初旬、無事全原稿が完成を見たのである。すでに索引校正も終わり、いまは静かな気持ちで本の完成を待っている。

アジア経済研究所研究双書 No. 529となるこの本のタイトルは『アフリカ経済学宣言』とした。「アフリカ経済学」という造語は赤林英夫委員（慶応義塾大学）の発案である。

『宣言』とは言い過ぎではないか」という声も聞かしている。しかし、それくらいの思いを携えながらこの研究会には臨んできた。「経済学の最前線を意識し反映させた論文を」と、各執筆者に重たい負荷を担って頂いたのは、大袈裟に言えば、日本のアフリカ経済研究に新時代を拓きたかったからである。このプロジェクトをあと数年は継続して数冊の本を作り、アフリカ経済研究を志す若い世代に道標を遺したい。その最初の一里塚は、「この先に道あり」の宣言であってよいと考えた。

来年度からの後継研究会では新しい実証研究の在り方を探る。コートジボアールが政変によって分断されるまでブアケのWARDAに出向していた国際農林水産業研究センターの櫻井武司主任研究員を新メンバーにお迎えする。当所からは、昨年ウガンダから帰国した吉田栄一と、エチオピア研究の児玉由佳が加わることになった。オブザーバー参加はいつでも歓迎している。

(平野克己)

国際ワークショップ報告

2月15日に、アジ研にて「Emergent Actors in African Political Economy」と題したワークショップを開催しました。報告内容、報告者は以下のとおりです。報告要旨は近日発行予定です（非売品）。

Session 1 : Business Community

- “Emergent Business Actors in Nigeria in the Post-Adjustment Era,” Dr. Ayodeji Olukoju, University of Lagos

Discussant: Dr. Enisan A. Akinlo, Visiting Research Fellow, IDE

Session 2 : Youth and Women

- “Emergent Female Power in Popular Struggles in Nigeria,” Dr. Cyril Obi, Nigerian Institute of International Affairs

Discussant: Takehiko Ochiai, Ryukoku University

- A summary of Dr. Hussaina Abdullah’s working paper titled “The Nigerian Women’s Movement: Response to Adjustment and Democratisation,” Katsuya Mochizuki, IDE

Discussant: Dr. Makiko Toda, Tenri University

海外通信

■佐藤章（在アビジャン海外派遣員）：1月31日に大使館が「自主退避」を勧告、その4日後には「退避勧告」に引き上げられたので、否応なく出国し、この原稿はパリで書いています。しばらく日本に帰って様子を見ることになりました。アビジャン帰任は情勢次第なので、ただ淡々と待つのみです。退避が決まってあわただしく、共同研究者や受入機関のみなさんにあいさつをして回り、会えなかった人には置き手紙を書きました。自宅の荷物は必要なものだけをスーツケース二つ分だけ持ち出すことにして、家電やら本やら衣服やら車やらは全部置いていくことになりました。情勢はじきに好転していくはずですから、またアビジャンに帰って同僚と会えるだろうし、荷物も取り戻せることでしょう。しかし、もしも、の場合には、人もモノもこれっきりなのかもしれません。銃弾は飛んでこなくても、戦争は社会全体を薄い膜で覆っていて、日々の生活でいろいろな姿を見せますが、どうやら、「これっきり」の別れというもののその姿のひとつであるようです。き

っと、開戦以来コートディヴォワールでは、おびただしい数の「これっきり」が溢れていたに違いありません。自分の番になってようやくそのことに気がついたのでした。akiras@ide.go.jp

■牧野久美子（在ケープタウン海外派遣員）：ジョハネスバーグ南部、ゴールド・リーフ・シティ（金鉱山の跡地につくられた遊園地）のすぐ隣にアパートヘイト・ミュージアムがオープンして1年ほどになります。開館以来ずっと気になりつつもなかなか訪れる機会がなかったのですが、最近ようやく、このミュージアムを訪問することができました。

ミュージアムの外観は、コンクリートの打ちっ放しが洗練された印象を与える、端的に「カッコいい」ものなのですが、アパートヘイトについて「知る」というよりも「追体験する」ことをコンセプトとして構成されているインスタレーションやビデオ映像を見て回るうちに、同じ建物の印象が、冷たく、息苦しさを感じさせる「監獄」のそれへと変わっていきます。ケープタウンのロベン島ミュージアムがマンデラやソブクウェなど「闘争のヒーロー」に焦点を当てたものであるのに対して、このミュージアムは「ふつうの人々」が日常的に生きていたアパートヘイトを生々しく伝えるものです。

密度の濃い展示で、やや急ぎ足でも2時間ほどかかりますが、調査でもビジネスでも観光でも、ジョハネスバーグに来られる際には（本誌の読者には比較的そういった機会のある方が多いかと思いますが）、ぜひ一度このミュージアムを訪れてみてください。

アフリカレポート 第36号

2003年3月31日発行

編集・発行 日本貿易振興会 アジア経済研究所

編集 地域研究第2部

発行 研究支援部

〒261-8545 千葉県千葉市美浜区若葉3-2-2

TEL 043-299-9735 FAX 043-299-9736